仙台教区報

カトリック仙台司教区事務所
〒980
仙台市青葉区本町1丁目2番12号
☎ 022（222）7371
FAX 022（222）7378
編集・発行　板垣　勤

「霊の実に富んだ年でありますように」

司教年頭書簡（要旨）

一九九二年の年頭にあたり佐藤司教は恒例の年頭司教書簡を発表しました。「霊の実に富んだ年でありますように」と題された書簡の要旨を以下にお知らせします。

新しい年の始めにあたり、今年一年の心の支えとなりますようにご一緒に聖書のことばを味わいましょう。

「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」（フィリピ4の4~7）

《主において常に喜ぶ》ということは、キリスト者の霊性の根本です。神の招きに応え、主キリストとともに生きるために、神の子供としていただいた私たちです。どうして喜ばずにいられましょう。

ミサ聖祭のたび毎に繰り返され、思い起される《キリストの平和》は、世が与えるような平和ではなく、《神の平和》なのです。その《神の平和》が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう、とパウロは言います。

《主における喜び》も、単なる人間的な喜びの感情にとどまらず、心の奥深く住みたもう神の愛・聖霊の働きによる喜びなのです。現実の苦しみの中にありながら、心からの喜びを反映させているキリスト者の顔は、本当に美しいものです。そして、聖霊の輝きを映し出した《美しい顔》は、周囲の人々の心を打つでしょう。

《美しい顔》をもって《世の光》となり《美しい足》をもって《地の塩》となる。これこそキリスト者の生きる姿であり《福音宣教の実践》ではないでしょうか。

昨年、仙台教区内では「家庭における諸問題」をめぐって話し合って来ましたが、今年は焦点を絞って「日本の社会と家庭」あるいは、「福音の光を照らして見た、家庭と日本の社会」とでもいうようなテーマで、話し合いを深めていただきたいと思います。

日本の社会のもろもろの現実が、キリスト者の家庭も含め、すべての家庭にどれほど深刻な影響を及ぼしているかは、私たち皆が日々痛感しているところです。このままでいい筈はない、と誰もが心を痛めています。特に、キリスト者の目で見た場合、神の福音の示しているところと余りにも違い過ぎるのではないでしょうか。福音の教えを社会の中に持ち込み、日本の社会を変えてゆく必要があります。また、社会の土台・細胞であるあらゆる家庭が神の祝福に満たされたものとなってゆかなければなりません。そのためにも、「家庭から見た福音宣教」ということは重要なテーマです。

考えてみるべきことは多く、具体的な方策を見出すこともむずかしいでしょうが、その中でも、日本の教会全体にとって最も重要な、根本的課題であると考えられることを、三つか四つの課題に絞ってみてください。

この新しい年が、「霊の実に富んだ年でありますように」と祈りながら、年頭の司教掩祝を送ります。

カ障連仙台大会報告

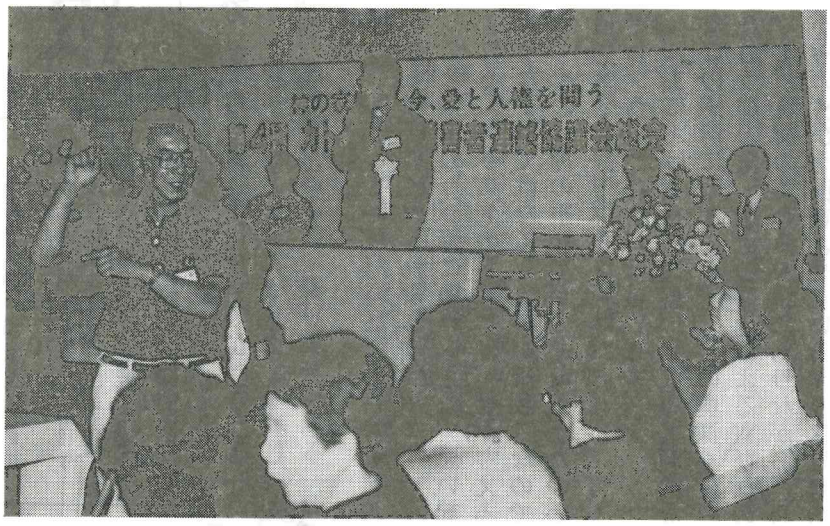
第4回カトリック障害者連絡協議会総会（カ障連仙台大会）が9月28、29日に元寺小路教会聖堂を会場に開催された。3年毎に開かれる大会は、障害を持つ人と持たない人がともに集まって学びと交流を深めることを目指し、全国から二百三十八名の参加者があった。

総会は事業に関する一連の報告が行なわれ、ついで第4回総会宣言が発表された。宣言は社会と教会内の福音化について述べ新たな3年間に向けての決意、「障害者に関する司教教書」を求めるなど教会への要望を表明したもの。

その後、イエズス会の安藤勇神父の基調講演、3名の障害者による事例報告、懇親会、分団会での話し合いと盛り沢山であった。

安藤神父は「教会にとって、人間社会とは」と題して教会の世界観と社会教説について話し、その中で、日本人は障害者との協調が苦手であること、障害者として小さい者とされていても、一人一人何かに役立つ生き方があることをすべての人が知り、認めることの必要を強調した。

事例報告では小川利秀（石巻教会）さんが自分の信仰歴を振り返り、出会った人々によって信仰が育てられたこと、視力障害者として人と協調して生きていくことが難しいことを語り、最後に障害者が要求のみに固執せず、共同体の一員として生きる使命の一端を担っていることを指摘した。



白柳聡（東京教区）さんは聴覚障害者としての体験から、おもに手話ミサについて語り、手話ができる人がもっとほしいと訴え、日吉敏子（名古屋教区）さんは暮しの中で自分を見ること、障害の問題を捉えること、そして信仰を見つめることについて話した。

総会の後には聖堂内で立食による懇親会が催され、出席者はなごやかな雰囲気の中で歓談の時を過ごした。

二日目はミサ、分団会での話し合いが持たれ活発な話しがとびかった。昼食後、次回での再開を約束し、観光に出かける人、家路に向かう人と分かれて大会は終了となった。

大会を終えて

今大会の実行委員会では「大会が無事、成功のうちに幕を閉じられたのはたくさんの人の力が結集されたから。すべてが初めてのことで、課題をたくさん抱えながらの準備だったが、地元の教会はもとより、仙台市、ボーイスカウト・ガールスカウトなど、各種の団体の物心両面の協力は大会成功の大きな要因となった。」と感謝を込めて語っている。

見えないところで働く多くの人に支えられて運営された大会は、障害者に関わる問題の深さを感じさせながらも、お互いが理解しようとすること、気配りをして労力を人のために使うことでかなり解決できる問題であることを、体験を通して教えられる機会ともなった。

教区センター建設

基本設計が決定　92年春工事着工

昨年11月10日に開催された第5回建設委員会総会で、基本設計案と資金計画見直し案について審議があり、どちらも承認されました。

基本設計は当初考えられていた案に比べると大幅な変更がみられます。設計図の詳細と資金計画の見直し案は「教区センター建設ニュース」14号に掲載されています。

設計図で目立つのは①聖堂部分で信徒席が祭壇に対して「横づかい」の形で配置。床面積が約百坪増加。②事務棟部分の地下階は取り止め納骨堂も作らない点です。

資金計画は建設費の上昇などの影響を受け、設計変更などで遣り繰りしても、当初見込み通り進められないので見直すことになりました。変更総事業費の概算額は八億一五〇〇万円となり、現在の建築業界の工事単価から算出しています。これは当初の資金計画の60%増の金額です。このために資金計画の見直しによる新たな追加募金が必要になったものである。

教区センター建設工事は今年度の復活祭以降に始まる予定です。その手始めに現在の信徒館を仮聖堂、仮司祭館に、旧YBU文化センターを仮司教区事務所として使うための改造工事などが進められます。ご理解、ご協力をお願いいたします。

金祝記念ミサ

司祭叙階50周年を祝って11月4日に元寺小路教会で金祝記念ミサがありました。

当日は3名の金祝を迎えた司祭のうち、深沢守三(塩釜教会)神父、児山六七男(白石教会)神父が出席し、司教以下30名の司祭団と二三〇名の参列者によって感謝の心を込めたミサが捧げました。

なお、金祝をお祝いして仙台教区から記念の御像が三人の司祭に贈られました。スイスに帰国したJ・シューマヘル神父には船便で送り届けました。

修道誓願式

○オタワ愛徳修道女会

9月23日に東仙台教会で終生誓願式が行なわれた。立願者は竹中史江(横浜教区出身)さん、山下美枝子(福岡教区出身)さんの2名。2人は現在、弘前の特別養護老人施設・大清水ホームで使徒職に従事している。

○聖ウルスラ修道会

11月4日に仙台の聖ウルスラ修道会本部修道院で初誓願式が行なわれた。立願者は石井清美(札幌教区出身)さん。式には日本を訪問中のカナダの総本部総長スザンヌ・ブレさんが参列。石井さんは教師となるために準備中。

祝　褒賞受賞

駆けた一筋の道　今輝く

平成3年秋の褒賞受賞者が仙台教区から二人選ばれました。八戸聖ウルスラ学院理事長のノエラ・ゴドロさんは教育功労の業績により藍綬褒賞、篠田教会のパウル・ラヴォア神父は青森県の幼児教育振興に寄与した功績により勲五等瑞宝章を授けられました。

二人の受賞は各地でのカトリック教会の教育活動が認められたものであり、二人はもとより教区の喜びでもある。

○ノエラ・ゴドロさんの言葉

「身にあまる光栄です。この言葉の意味が今回分かったような感じがします。自分に関係ない褒賞と思ってましたから。私は生徒を集団の中で個を光らせ、その個性を他人のために使える人間になるよう指導しています。10年、20年かかって自分の教えた結果が出るのが教育です。大変ですがやりがいのある仕事です」

○パウル・ラヴォア神父の言葉

「受賞できたのは幼稚園の先生方や父母の助けがあったからこそ。私は子供たちが、自然を愛する心を失わないよう努力してきた。これからも人間同士の交わりや愛し合うことの大切さを、できるだけ多くの子供に伝えていきたい」

研修会参加報告

「福音宣教者となるために」の研修を終えて

渡辺恵子（須賀川教会）

去る9月21日より二泊三日の日程で教区司牧評議会から派遣される一人として、研修会に参加させていただきました。研修会場は名古屋の日本カトリック研修センターでした。開設間もないセンターは大変立派で、設備も充実しております。これからの時代のニーズにマッチした施設で誇りに思いました。

ところで、参加した30名の中には遠く九州、四国からの人が何人かあり、鹿児島県の奄美大島からは2名の方が参加され感心させられました。そして、どんな時にもまず「参加しよう」との意志が必要であるとつくづく思いました。

さて、内容のほうはといいますと、いたって盛り沢山でした。が、疲労感はほとんどなく、いつも満たされていたようです。それは多分、分かち合いが主立っていたからだと思います。

研修は7人1組のグループを4グループ作って進められました。各グループはテーマに沿って内省し、感じたこと考えたことを分かち合う、これを何度も繰り返しました。もちろん、各テーマの方向は「福音宣教者となるために」です。ボーッとしている暇などありませんでした。合間にはよく歌も歌いました。

時が経つにつれ、皆さん一人一人が深められ感動を覚えた様子でした。キリストを中心に「まどい（円居）」がある。共にいることの幸福感でいっぱいでした。この幸福感をキリストを知らない周りの人とも分かち合いたい……。

このような研修を多くの人に体験してもらいたいと思います。そして、あの時の感動と恵みをあの時だけのもの、自分だけのものに終わらせない。今、私はこのことについて考えているところです。

ところで、皆さんにとっての「福音」・「福音宣教」とは何でしょうか。共に探していきたいものですね。

研修センター92年春季分コース案内

○「地球にやさしい若さをもとめて」
対象　青年男女（20才以上）
時　2月9日(日) 15:00~11日(火) 13:00
費用　20,600(交通費を除く)

○「小さきものとの共感をめざして」
対象　信徒、修道者、司祭、司教
時　3月20日(金) 15:00~22日(日) 13:00
費用　20,600(交通費を除く)
※問い合わせ先
466 名古屋市昭和区広路町隼人30
日本カトリック研修センター
TEL 052-831-5317

落成・献堂式

○聖ドミニコ学院幼稚園
園舎立て替えが終わって10月21日に落成祝別式を行なった。新園舎は鉄筋コンクリート造一部（屋根）鉄骨造2階建の明るい建物である。

○聖パウロ女子修道会
修道院移転新築工事が終了して12月7日に落成祝別式が行なわれた。建物はバス通りに面し、広い駐車場のある日当たりのいい2階建である。
新住所 983 仙台市宮城野区二の森12-37
電話 022-257-7555
書院は従来通り元寺小路教会内

○畳屋丁教会聖堂
小さき花幼稚園園舎立て替えに伴って、新聖堂を建築していた畳屋丁教会は12月に建物が完成。完成後、すぐに聖堂として使っていた建物の祝別献堂式が1月11日に佐藤司教によって行なわれた。
建物は木骨モルタル造りで、聖堂、集会室などが備えられている。聖堂は木の香りいっぱいでステンドグラスに囲まれた床暖房設備を持つものである。

仙台教区司祭大会開催される

2年に一度開かれている仙台教区司祭大会が岩手県平泉で開かれました。今回で18回目になる大会は開催が予定されていた3教区（浦和・新潟・仙台）司祭大会が開かれなくなったのに替えて開催が急に決まったものです。

大会は49名の参加者があり、来年度に迫った第2回福音宣教推進全国会議を前に、司祭間の意識を深めることを大きな目標として「今、家庭が司祭に求めること」をテーマに据えて、3人の信徒の方の話を聞きながら進められました。そして、いろいろの話を聞きグループで自由時間も使って活発に話し合うことができました。また、大会のテーマを深め全国会議をより良く理解し、教区の中に意識を浸み込ませるために第2回福音宣教推進全国会議事務局長の小田武彦神父を招き、質疑を交えていろいろの話を聞きました。

最初の話題提供は日置孝次郎・温子（四ッ家教会）夫妻からあり、「司祭は結婚していないから家庭がないと言わないでほしい。神様の導きのもと自分が育てられた家庭、家族があるのだから。また、自分たちは家庭、家族があることで和解、一致を取り戻そうとする復元力を与えられている」との話は司祭の意識の転換を促すものであった。次に小岩幸代（東仙台教会）さんは幼いときから長崎で信仰生活を送り、今は家庭の中で一人信者として暮らしている体験をもとに「自分が変わらなければ何も変わらない。信者のなかにはいろいろの事情を抱えて生き、教会に来ていることもあるから司祭、信徒は暖かく見守ってほしい」との話があった。

○参加司祭の声

・司牧の現場で信徒と歩み、今一度問題にぶつかりあいながら全国会議のために準備する作業に取り組みたい。

・全国会議の基本的な認識として「神の民の刷新」が大事なテーマである。

・神学用語などを使わずに下からの歩みを大切にしていきたい。

・聖書を生きて行くためのテキストとして今まで以上に読んでいきたい。

アンケート結果について

大会の中で教区内で10月27日に「第2回福音宣教推進全国会議にむけて」アンケートをとった結果報告があった。それによると、まず第1回福音宣教推進全国会議の結果は具体的な成果として表だって見えるものは少ないようである。その一つの理由として考えられるのは現場の司祭の意識が信徒に大きな影響力を持っていることにありそう。これは司祭が大きなチャレンジを突き付けられたということ。

さらに、アンケートの結果を見ると、第2回福音宣教推進全国会議への関心は案外あるということが分かった。第1回福音宣教推進全国会議の9つの課題の中で、最も関心を持ったことはとの設問に対して「家庭で信仰を生きるには」に二八六名の回答が寄せられている。これは全回答者の37％に当たる。これはまだまだ関心が低いともいえる数字だが、教区の中で更に第2回福音宣教推進全国会議への関心を高める足掛かりになると考えられる。

仙台司教区「海外宣教の日」

2月2日（日）は4回目を迎えた仙台司教区「海外宣教の日」です。現在仙台教区ではブラジルに宣教師として首藤神父を派遣していますが、その働きのために多くの人たちの支援が必要とされています。前回は宣教活動のために必要な船を購入するためにたくさんのご協力をしていただきました。今回の献金も首藤神父の働きを支えるために使われます。

なお、海外で宣教活動に携わっている教区出身者がたくさんいることをも覚えてその方たちのためにも、お祈りとご支援をいただければ幸いです。

詳しくはカトリック中央協議会国際協力委員会まで。

JCNA全国大会が仙台で開催される

「協力と奉仕の手をつなぐ看護」をテーマに掲げて第33回JCNA（日本カトリック看護協会）全国大会が9月21、22日に仙台で開かれました。全国から約70名の会員が集まった今回の大会は佐藤司教出席のもと、井原彰一神父（ドミニコ会）の基調講演「病める人に近づく者」、高梨光太郎（一本杉教会）さんの講演「アジアの兄弟と日本」を中心にすえた内容豊富な大会となりました。

井原神父は講演の中で日本全国で生と死について考える多くの人たちの活動に言及し、カトリックナースの生き方を語りました。看護婦が医療の専門職に従事するものであり、更にキリストの愛を宣べ伝える者として病める人にどのように近づいていったらよいかを共に考えようと呼びかけ、社会や医療現場で問題にされていること、課題として取り組むべきことについて多くの示唆を与えました。その中でカトリックナースが「しるし」として自己の存在の価値を深められられるとき、病める人のかけがえのない独自な存在の神秘も深められるとの話は参加者に勇気を与えるものとなりました。

高梨氏は体験を通して考え、学んだことを、国際化が進展している日本の社会に生きる看護婦も知ってほしいとの観点から、仙台にも多くの国際的な繋がりが出てきている実状を語りました。

今回の大会は93年に名古屋で開かれるアジア大会の資金作りのバザーも行なわれるなどで、今までにない充実した大会となりました。（なお、JCNA仙台支部では50度数のテレホンカードを販売して資金作りを続けています。問い合わせはスペルマン病院内の仙台支部まで）

さらなる飛躍を願って

八戸聖ウルスラ学院創立60周年

工藤　勝三（八戸塩町教会）

昭和6年に白石イシミ氏により八戸和洋裁縫女塾として始められ、経営母体や名称変更を重ねて白菊学園として昭和25年に聖ウルスラ修道会に経営が移管された八戸聖ウルスラ学院は創立60周年を迎えました。

平成元年度に現在の名称に変更し、世界のウルスラ学院姉妹校の一員となった同校は、これを記念して9月26日に八戸公会堂で式典を盛大に開催しました。

挨拶に立ったノエラ・ゴドロ理事長は「60周年にあたり学院の一人一人が建学の精神をいま一度振り返り、キリスト教的人間観と聖書の教えを学んでほしい。私たちを育ててくださったすべての人に深く感謝します。私たちが創立者や先輩方に対して誠実な生き方ができるように見守ってください。」と語った。ついで園児、児童、生徒の代表から喜びの言葉と仙台司教区総代理の梅津明生神父からお祝いの言葉があった。

来賓の中里信男八戸市長は「八戸の地に咲いた一輪の白菊がいま大輪の花を咲かせた」と八戸市民に長く親しまれた旧校名にちなんだ祝辞を述べられた。

最後に八戸市出身の安井光雄神父による「真の国際性とは」と題する記念講演がユーモアあふれる八戸弁で行なわれ、聴衆の耳目を奪った。

JOCの正月

「共同正月　出会いの正月イン仙台」と名付けて、年末年始に東仙台の光ヶ丘研修所でJOC（ジョック・カトリック労働者連盟）の集いが行なわれました。

ジョシスト有志の呼び掛けで開かれた集まりには札幌から下関まで70人に及ぶ全国各地のジョシストが参加しました。この集まりは年末年始に故郷に帰るのが大変な仲間と一緒に正月を過ごし、本当の友達になろうとの思いを込めたものです。冬の松島見物、スキーや温泉巡りなどを楽しみながらの集いは寒さをものともしない熱気あふれる盛大なものでした。集いには佐藤司教が飲物を差し入れての顔出しもあり参加者から大いに喜ばれました。

信仰雑感

祈りの日々

江崎　深雪（築館教会）

私は今、東北新生園で闘病生活をしています。東北新生園は私たちすべての生活の場でもあります。そのようなわけで入園者は何か心の安らぎを求め、それぞれの趣味に応じたグループ活動に参加しています。この頃はでゲートボール、ミニゴルフ、カラオケなど自分にできるものを求めて生き甲斐を感じております。

私は詩や短歌を少々作って頭がボケないようにと心がけています。ここはとにかく特殊な環境ですので視野もせまく歌材も乏しい中で今日まであきずに作ってきたものだと思っています。それでも、今では社会との交流も盛んになりました。それで着想も広くなり、歌材も豊かになったと喜んでいますが、老人になり日々重(おも)りゆく肉体には勝てません。

私は毎朝、入園者の妹が作ってくれる四季折々の草花を、私が作った小さい祭壇の前に毎日生け替え、午前中の治療を終えてから妹とロザリオの祈りをしマリア様のお助けを願っています。亡き人のため、病室の人のため、それぞれの意向で萎えた指先で爪操るロザリオの祈りです。老人であっても、病人であっても心から祈るとき、祈ることによって、毎日が楽しく暮らすことができます。感謝また感謝です。

ある人は私に言います。あんたは病気が重れていても、よく笑っていられるねェ…と。私がくよくよしたって病気が直るわけでもなしと言いますと、そうねェ…といって笑いましたので、私たちは大きく笑い合いました。肉体は重れて見るかげもない私ですが、精神だけはと思い張り切っております。そのようなわけで、祈っている時が私の一番満ち足りた時といえます。

私はロザリオの祈りを一連でも多く祈って祈りの花束を捧げようと今日も祈っています。イエス・キリスト様とマリア様の霊的生活を黙想しながら自分の持ちまえの力を持って祈っております。

主よ、主よという人が必ず天国に生けるものでもないとイエス様は言います。私は罪人ですが祈らないとますます悪人になってしまいます。人に笑われてもロザリオの祈りとともに歩き、罪深い私を助けてくださいと願っております。そして、昨日より今日、今日より明日というように、思いやりの心を持って罪を犯さないように心がけています。

私は先ず祈りを第一にし、そして文芸に支えられ、老人であり、病み人であっても生き生きとした余生を送りたいと思っています。今、生かされている喜びを神に感謝して、この茨の道を雄々しく歩いて生きたいと念じております。

風

芝田　幸子（原文は点字）

手袋を　しても
フードを　かぶっても
それでも
しのびこんでくる　あなた
一人ぼっちが
そんなに
淋しいのなら
少しの　あいだ
わたしの中で
暖まって　おいき
涙が　みぞれに
変わるほど
悲しいことが
あるのなら
わたしに　話してごらん
春が　来たら
わたしの　ことなど
忘れて
花や　木々のあいだを
駆けめぐり
小鳥たちと
たわむれるが　いい
わたしも
淋しく　なったら
虹に　なって
光と　たわむれるから

（ある雑誌から引用しました）

福島県カトリックの集いより

得能　育夫（湯本教会）

福島県で9月14日に小名浜教会で第21回カトリックの集いが開かれた。二百三十名が参加した大会のテーマは「神の望まれる家庭を目指そう」でした。

ここでは講演の要旨を紹介します。講演者はトンガ国出身いわき市在住の永田リセさんです。永田さんは強い信仰に支えられた生き方を語り、日本人の忘れかけている家庭の在り方、親子の問題を指摘しながら聞く人に多くの感銘を与えてくれました。また、いつも神とともに歩み、人々のために積極的に参加協力する永田さんは多くの人から好感を持たれています。

私は何故日本に来たのでしょうか。それは家庭を大切にするからです。故国トンガの両親は家庭を大切にしています。たとえば、父親が帰天した際に何度も飛行機を乗り換えて行ったのに、母親から「早く日本に戻りなさい。天国のお父さんもそれを望んでいるのです」と言われたのです。

故国の両親の姿から、子供に与える家庭の信仰と躾がどれ程大切であるかしみじみと思い知らされました。私も沖縄で出産の苦しみの中で神に信頼して祈り、決死の覚悟で子供の生命を守りました。また、主人が信仰を持つように神に祈り導く努力もしました。

義父から義母が病気になったので病院か施設に入れようと思うと相談を受け、重病でない限り私がお世話しますから安心してください、と言った時、義父は日本の娘や嫁でさえ嫌がるものを外国の嫁が「世話するのが当たり前です」と言ったと感激していたことがありました。

私は日本の家庭に入ってからは嫁と姑との関係に限らず、相手の立場を考えて行動してきました。

聖書のことば

万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。あなたたちが畏るべき方は主。御前におののくべき方は主。

（イザヤ　8・13　新共同訳）

強く見えるもの、頼り甲斐があるように思えるものが私たちの周りにたくさんあります。これさえあればと人は安心することもあります。でも、本当に頼れるものを見出している人はそんなに多くはありません。生活の中で神を第一としている人に幸いがあります。

教区出身司祭誕生（続報）

教区司祭の誕生を昨年4月に祝った仙台教区に教区出身司祭誕生のニュースがもう一つあります。新司祭は気仙沼教会出身でイエズス会員の菅原裕二さん。家族は現在岩手県大船渡市に住んでいる。

叙階式はイエズス会創立者の聖イグナチオ・ロヨラ生誕五百周年を祝う一連の行事の最終日7月31日に白柳大司教の司式で東京・麹町教会で執り行なわれた。

教区内各地の教会では菅原神父の初ミサがあり、特に菅原神父も在籍し、イエズス会の大泉孝神父を生み出した大河原教会では、気仙沼教会同様に新司祭誕生を大変喜んでいる。なお、菅原神父はローマ・グレゴリアン大学で引き続き勉学中。

編集後記

原稿の催促をしながら、肝心の編集がおろそかになったとき、どのようになるかの見本を披露することになりました▼意図せずしてと言うことは慎みますが、よく言えばバラェティーに富んでいる今回の出来にたくさんの批評をお寄せください▼支離滅裂の妙味（？）を味わっていただければうれしく思います▼原稿募集は継続中！